

聴覚障がいについての講演 レポート

琉球大学 理学部 4年

講演を通して、ろう者の世界観と、その世界観における手話の存在感を基礎から触れることができた。恥ずかしながら筆者は手話に関して興味を持つにとどまり、実際に手話を用いての意思の疎通ができない。そのため、「言語としての手話」という視点は、アクセシビリティリーダーとしての社会貢献を実践していく前段階の学びとして非常に参考となった。

また、普段手話を用いない筆者にとって、実際に自分の手を動かして手話を行うことは非常に難しかった。ほとんど初めての動きだったということもあるだろうが、とても意思疎通のスピード感についていけるほどの動きは出来なかった。これは、聴覚障がいに向き合う上で、より実感の伴う体験となった。今後はぜひ耳をふさいだうえで、ろう者の世界観を体験してみたい。

さて、今回の講義では、沖縄聴覚障害者情報センターの川上恵さんが手話を使用して発言をし、それを通訳者が音声言語化するという形で講演を行っていただいた。川上さんは生まれつき耳が聞こえないとのことであり、ひとくちに「聴覚障がい者」といっても、その中にも多様性があることを感じた。そしてこの多様性こそが、この講演を通して筆者が学んだことの一番大きな気づきであった。

例えば、手話を使う人間にしても、ろう者、難聴者、中途失聴者など多種多様である。さらに同じように手話を用いていても、住んでいる地域や年代によっても多少の差が存在する。これについて、手話が言語であるという視点で見れば、方言や若者言葉が存在することはごく当たり前のことであるとも捉えられるが、真に重要なのはこの「手話が言語である」という認識である。障がい者という言葉で簡単に表される状態はいくつか存在するが、その言葉は世界を健常者と障がい者とに極端に二分するものとなりうる危険性を孕んでいる。実際の世界は多様な状態であふれており、そこにはグラデーションが存在する。「手話が言語である」という認識は、わかりやすくも危険な二分化の風潮に歯止めをかけ、正しくグラデーションのある世界を見る目を養う一助となるのではないかと思う。単に耳が聞こえないという状態を障がいと捉えるよりも、耳が聞こえないことで社会にアクセスできなくなることが障がいであるという視点を持てば、おのずと私たち自身が何を变え、何を始めれば良いのかがわかるはずだ。

上でも述べたとおり、手話を言語としてとらえる視点は、アクセシビリティリーダーとしての重要な姿勢づくりを促すものであると感じる。手話やろう者の現状を知ることも大事であるが、同時にアクセシビリティリーダーとしての自覚を育み、広い視野と問題意識を持ち、社会の不条理や意識の改革に乗り出す強い意志を作り上げていくことも重要だ。あらゆる人間が過ごしやすさを感じるためには、一人一人が問題意識を共有することが必要となるし、そうした問題意識を育てさせていく立場のアクセシビリティリーダーが、まずは自己成長を遂げることが望まれる。今回の講演では、改めて自身の知識不足と、問題意識の低さを痛感した。一人のアクセシビリティリーダーとして、この焦りをより高い段階へと自身を変容させるエネルギーとしていきたい。

まずは今回の講演での学びを消化し、知識を増やし、聴覚障がいに関わる活動団体へと足を運びたい。

以上